

〈国際学会印象記〉 第13回 International Histocompatibility Workshop and Congress.

森島 泰雄

愛知県がんセンター病院, 血液化学療法部

第13回のInternational Histocompatibility Workshop (IHWS)とInternational Congress of Histocompatibility & Immunogeneticsが前者は2002年5月12日から16日までカナダのBritish Columbia州のビクトリアで、引き続き後者がアメリカのWashington州シアトルで5月18日から22日まで開催された。ビクトリアはバンクーバーからほど近い小島の入り江に面した英国風の趣のあるリゾート観光地で、期待どおりシーフード（とくにサーモン）が美味しかった。IHWSを終えた参加者は船でシアトルに移動した。ビクトリアとシアトルとは国が違うが隣町で、シアトルからは富士山のようなレイニエ山が遠望できた。

この伝統あるWorkshopは言うまでもなくHLAの歴史を作ってきた国際会議であるが、前回は1996年のパリであり、実に7年ぶりの開催となった。この会議のchairmanはシアトルFred Hutchinson Cancer Research Center (FHCRC) のDr. John A Hansenである。FHCRCは造血幹細胞移植（以前は骨髄移植と呼ばれていた）のメッカとされているところであり、Dr E. Donnall Thomasはノーベル賞を授与されている。Dr HansenはFHCRCでHLAに関する基礎的な研究とともに、造血幹細胞移植とHLAについての解析で世界をリードしてきた移植医で、わたしの古くからの友人である。

わたしはといえば、16年前にDr Bo Dupontがニュージャージーのプリンストンとニューヨークで主催したこの会議に出席した（実際にはactiveには何もしなかった）ことがあるだけで、その後HLA自体の研究からは遠ざかり、造血幹細胞移植や骨髄バンクなどの臨床を行っていたので、この会議にはあ

まり縁がなかった。2001年の7月頃、吉田考人先生と十字猛夫先生から「Dr HansenがこのWorkshopにおいてHCT (hematopoietic cell transplantation) componentを企画しているから」とお誘いを受けたのがきっかけで、このHCT componentに参加することとなった。

さて、ビクトリアでのworkshopは以下に示すようなcomponent working groupが組織され、これまでのworkshopの進め方とおなじように、データ解析や討議が行なわれた。

Hematopoietic cell transplantation

NK/KIR genes

Anthropology

Biology of HLA-E, F, and G

Chronic rejection

Cytokine gene polymorphism

Database and biostatistics

Genomic analysis of human MHC haplotype

HLA expression in cancer

Serology, null alleles, and class I phenotype

Disease

Technology

ClassicalなHLAに加えて、HLA-E, F, GやNK gene, microsatellite markerの解析やその臨床応用などが焦点になった。HCT component以外のセッションを聞く余裕はなかったが、serologyでは日赤の十字先生、石川先生、柏瀬先生、田中先生、HLA-E, F, Gでは石谷先生、cytokine geneでは吉田先生、石川先生、microsatelliteでは猪子先生らが積極的に参加されていた。HCT componentには15カ国から24の骨髄バ

ンクや移植センターが参加し、非血縁者間移植2574例のドナーと患者のHLA遺伝子型と臨床データが集積された。日本骨髄バンクを介する移植(JMDP)とそれ以外の移植(non-JMDP)とを対比するかたちで進められ、日本ではHLA-A, B抗原の違いが、移植後の生存にとり重要であり、欧米では重要性でないとの従来の主張を確認するところから始まり、これらの違いを解く鍵は、両者におけるHLA genotypeの違いであり、許容できるHLA(移植免疫反応を惹起しないHLA型の組み合わせ)の存在とその解析が焦点になり、このworkshop終了後もHCT componentは続くことになった。

二つの会議の間に「the Second International Symposium on Minor Histocompatibility Antigens」と「HLA-peptide Ligands」のシンポジウムが開催され、いずれも現在のトピックスでありタイムリーな企画であった。

SeattleのCongressでは、すべての発表演題の中からfeatured symposiumとして12題が選ばれたが、その中に東海大安西先生らの「genomic comparison between chimpanzee and human by nucleotide sequencing within class I region」と奈良医大石谷先生らの「protein expression and peptide binding suggest unique and interesting functional roles for HLA-E, F, and G in maternal-placental immune recognition」の発表があり良かった。さらに、東海大猪子先生によるkeynote address「From HLA to human genome diversities: Disease gene mapping by association analysis using microsatellite」は注目を集めた。

Congressにおける個々の発表のついて解説できるだけの余裕はなかったが、全体として古典的なHLAから始まった解析がその他の組織適合性抗原へと広がりを見せ、組織適合性研究は21世紀の入り新たな展開を見せていることが確認できた。抗原や遺伝子とその多型が具体的に同定されてきて、わたしの専門とする造血幹細胞移植への応用を考える上でも参考になった。

私にとって、このworkshopでは解析と討議で大変であったが、昔20年ほど前にDr Bo Dupontのラボに留学していた当時のフェローの幾人かがこの会議でも活躍しており、FHCRCのDrsとも話ができ、な

つかしく楽しい会議であった。

次回の会議はオーストラリアで開催されることになった。